

加古川市八幡町の宗佐遺跡 第3次発掘が継続中 このあたりは掘ればぶつかる？

現在、第3次発掘作業が進行中（写真）。見つかった限りは、調査して資料を残さなければならぬ。この積み重ねが日本の歴史を知る上で重要。そのためにつぎ込まれる時間とエネルギー（人・モノ・金）は相当のものだ。今回は東播自動車道建設工事現場で見つかった遺跡の継続調査（第3次調査）であるから、その原資は公である。



宗佐遺跡の第3次調査風景（2019.7.19）

加古川のほぼ中流と下流にあたるこの地域は、近くに古墳もあり古くから人が住んだ地であるようだ。

埋蔵文化財発掘調査情報 宗佐遺跡（2019.7.5）

<https://www.hyogo-ctc.or.jp/ctc/business/storage/detail.php?p=82>

山陽自動車道
加古川
JR加古川線
兵庫大学
宗佐遺跡

朱墨付きすずりと大型建物跡を発見

奈良—平安期、統治者居住か

加古川・宗佐遺跡
兵庫県教育委員会は20日、加古川市八幡町宗佐の宗佐遺跡で、奈良時代から平安時代初期の大型建物跡や、同時期に、朱色の墨をすったすずりなびを発掘したと発表した。建物は、地域の統治者や住んだ館の可能性があるという。同遺跡では、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての遺構が残っていた。

自動車専用道路「東播磨道」のランプ建設に先立ち、6月から約4千平方メートルを発掘。弥生後期—古墳初期の奈良—平安初期—平安後期—鎌倉の遺構が見つかった。

奈良から平安初期の遺構からは、二つの大型建物跡（12.5×6.5、8.6×4.3）を示す柱の穴が見つかった。東西南北を整えた構造から、農村集落ではなく、当時の行政単位の「郷」を統治した長の館の可能性があると推測。

併せて、すずりの破片も三つ出土した。うち一つは、器を転用したすずりの破片（長辺約7センチ）の全面に、朱墨が点々と残っていた。朱墨が残る同時期のすずりは県内で5例目という。器の転用ではなく、

道「のランプ建設に先立ち、6月から約4千平方メートルを発掘。弥生後期—古墳初期の奈良—平安初期—平安後期—鎌倉の遺構が見つかった。当時は寺院のみで使われていた瓦の破片も多数見つか。寺を管理する施設や、加古川の水運に関連する施設の可能性もある。

現地説明会を約午後1時半—3時に開く。小雨決行。遺構を案内するほか、すずりなど出土品を展示する。現地事務所 ☎079・4388・0005（広岡磨瑠）

●右のすずりには朱の墨が残る●大型建物があったことを示す柱の穴 加古川市八幡町宗佐（兵庫県教育委員会提供）

神戸新聞
2017.9.2

2018/7/19 05:30 神戸新聞NEXT

1800年前の集落跡発見 加古川の宗佐遺跡



保存状態の良い円形の竪穴住居跡 = 加古川市八幡町宗佐

拡大



戦国時代に洪水で埋まった川の断層。調査員が指し示す高さまで礫が詰まっている = 加古川市八幡町宗佐

拡大



神戸新聞NEXT

拡大

兵庫県教育委員会は18日、東播磨道の延伸工事に伴い発掘調査中の宗佐遺跡（加古川市八幡町宗佐）で、約1800年前の集落跡が見つかったと発表した。直径8メートルの円形住居など、竪穴住居が5棟確認され、火をくべた炉や柱穴など保存状態が良好という。また、当時からあった谷川が戦国時代に洪水で埋まった痕跡も確認され、水とともに生きてきた人々の暮らしがうかがえる。（広岡磨璃）

同遺跡は昨年発見され、今年発掘対象となったC地区（約1800平方メートル）の調査を9月まで実施。これまでに弥生時代終末－古墳時代初頭、平安時代中期、戦国時代の遺構が見つかった。

弥生－古墳期の遺構からは、5棟の竪穴住居跡が出土。昨年調査した南側のA・B地区（約4千平方メートル）と合わせると計10棟あり、同一集落だった可能性がある。5棟のうち円形の住居跡は、柱穴が6本のうち5本分確認できたほか、中心部に比べて外側が約10センチ高くなっている「高床部」、炉の炭の跡などがはっきりと残っていた。

地区の北端には東から西へ谷川が流れていたことや、谷川から水を引いていた溝も確認された。平安中期の溝もあり、各時代で谷川の水を利用していた様子が明らかになった。

この谷川は戦国時代には幅8メートル、深さ2メートルになっていたが、洪水で大量の土砂が流れ込んでいたことも分かった。「礫」と呼ばれる1～10センチの石で埋まっていたことから判明し、備前焼のすり鉢など16世紀の遺物が混じっていたという。

調査担当者は「時には水害に悩まされながら、水を利用した人々の生活が続いてきた様子がうかがえる」と話している。

21日午後1時半～3時に現地説明会を開く。駐車場に限りがあり、公共交通機関の利用が望ましい。現地事務所TEL079・438・3188

竪穴住居跡は14棟

宗佐遺跡 水路も新たに

加古川

県教育委員会は25日、東播磨道の延伸工事に伴い発掘中の宗佐遺跡（加古川市八幡町宗佐）で、弥生時代後期～古墳時代初頭（約1800年前）の竪穴住居跡2棟と、水路とみられる溝が見つかったと発表した。同遺跡の調査は本年度が最終となり、3年間で同時期の住居跡を計14棟確認。い

なみ野台地のすそに、まとまった集落があったことが分かった。遺跡は2017年に発見され、3年間で約1万平方メートルを発掘。本年度は、うち3300平方メートルを4～8月に調査している。

弥生後期～古墳初頭の住居跡は、直径約7メートルの円形と、約5メートル×約4メートルの長方形のそれぞれ一部。付近からは溝や、タコつぼなどの

土器も見つかり、調査担当者らは「台地上の森や集落近くの水源、少し離れた海など、自然の恩恵を受けながら生活していた様子がうかがえる」と話した。

また、平安時代後期～鎌倉時代の遺構からは、木棺墓や火葬跡、鍛冶遺構がそれぞれ1基見つかり、ふいこの一部も残っていた。戦



国時代の洪水跡もあり、前年度までの調査と合わせることで、土砂が南北60メートル以上に広がる大規模な洪水だったとみられる。付近の谷川が溢水した可能性があるという。現地説明会は27日午後1



新たに見つかった約1800年前の円形住居跡(手前)
|| 加古川市八幡町宗佐

時半～3時。県立考古博物館（播磨町大中1）でライブ中継もある。現地事務所
☎079・438・322
2
（広岡磨璃）